

## 小説『草枕』のふるさと小天

### 講師紹介

玉名市草枕交流館 館長

村田 由美 先生

熊本出身。日本女子大学大学院で日本文学、特に夏目漱石を研究されて、熊本に戻ってからも、大学の講義の傍ら、現在も漱石の研究を続けられておられます。熊本大学五校記念館客員准教授。



村田 由美 先生

### 講義内容

漱石は愛媛尋常中学校を1年でやめ、明治29年(1896年)には第五高等学校に赴任、以後熊本に4年3カ月居た。その間転居を繰り返し、引っ越し魔と言われているが決してそうではなく、むしろ鏡子夫人のために引っ越しをしている。

熊本では五高の生徒に尊敬をされていた。それに応えるべく漱石も一生懸命に努力をした。結婚して初めて迎えた正月に生徒や同僚が年始挨拶に来て、鏡子夫人に迷惑がかかったため、翌年からはそれを避けて正月には、旅行に出かけるようになる。最初に出かけたのが前田案山子の別荘であった小天温泉だ。

前田家は小天の権力者で、その土地は4里4方あったといい、前田家の土地を踏まずに熊本城下に行くことはできないと言われていた。案山子は、もと覚之助という名だったが、明治維新後、民と共に生きるという決意を込めて名を変えた。自由民権運動に力を注ぎ、小天の農民のために地租を引き下げたり、干拓地の免税に力を尽くしたりした。前田家別邸には、中江兆民や岸田俊子なども訪れている。また、中国革命の志士、孫文や黄興も宿泊した。



「前田家別邸全景」模型(草枕交流館提供)

漱石が小天に来たとき、案山子の次女卓(つな)は2度の結婚に失敗し実家に帰っていた。卓は『草枕』のヒロイン那美のモデルとされるが、のちに上京し、妹夫婦(宮崎滔天・榎)らを手伝い『民報社』のおばさんと親しまれ、中国革命に協力した。

漱石は明治33年英国留学の命をうけて熊本を離れる。留学後は熊本に戻らず、大学等で教鞭を執る傍ら、『吾輩は猫である』を発表し大評判となる。明治39年に発表した『草枕』は、この小天での体験を元に書かれたもので、漱石を職業作家に轉身させる契機となった。漱石にとって、小天の風景は留学先のロンドンでも思い出されるほど、心に残るものだった。



草枕交流館(同館提供)

#### 【草枕交流館の紹介】

2006年4月23日に夏目漱石の小説「草枕」の歴史資料館と「草枕」の観光案内施設としてオープン。

- 所在地: 玉名市天水町小天 735-1 (国道501号小天温泉バス停から徒歩10分、坂を上り400m先。途中に前田家別邸がある)
- 開館時間: 9:00~17:00
- 休館日: 水曜日
- 入館料: 無料
- 電話番号: 0968-82-4511